最優秀賞　国土交通大臣賞

# 一滴の水への思い

群馬大学教育学部附属中学校
三年　大澤　阿紋

「困っていること、これがないと困るというものは何ですか。」

「生活に必要な水ですか。」

生活に必要な水？…アナウンサーの問いに答えた被災地の人の意外な言葉。食べ物や飲み物をとっさに考えていた僕は驚いた。

昨年夏休み目前の七月、新潟県中越沖地震が起こった。僕の住む群馬県も随分大きな揺れだった。臨海学校で行った寺泊とお世話になった人達が頭に浮かんだ。

「困っている物は水です。手や食器を洗う水もなければお風呂に入ることも出来ない。トイレを流す水もない。」

飲み水や食べ物は比較的早く配給されても、普段の生活に使う水が圧倒的に足りていなかったのだ。水の出ない蛇口を前に食器の汚れを紙で拭き取り、洗い桶にはった僅かな水で濯いでいた。できるだけ紙皿を使うようにしているとインタビューに答えていた。台所横には水の入った大きなポリバケツ。子供達は真夏の炎天下、空のペットボトルやポリタンクを両手に給水車の列に並んでいた。トイレ用に川の水を持ち帰る親子もいた。僕はＴＶに映る被災地の様子にショックを受けた。暑い夏に水のない生活なんて考えられなかった。

「ある日突然、一滴も水が出なくなったら、僕達の生活はどうなるのだろう。しかも、いつ水が出るのか見当もつかなければ…」

怖くなった。でもこれは、単なる想像ではない。まさに隣の県で起こっている現実だった。思わず蛇口をひねって流れ出る水を確認した。安全な水の供給に一滴の水の重みを実感した。

夏休み明け、群馬県こどもエコクラブ交流会で初めて間伐体験をした。僕は、前橋市児童文化センター環境冒険隊として、ふだん県内河川の水質調査や樹木の汚れ調べ、絶滅危惧種のサクラ草の保護や培養を学びながら環境保護活動に取り組んでいる。活動を始めて五年目の今年はいつもと違う意味を持った。

小雨の中、うっそうと茂った森に入ると、高い木々が雨を遮り、霧が舞い湿気が顔に張り付くようだった。林道から一歩森に踏み出すと足下がフワフワとして歩きづらい。落ち葉や土が雨を吸い込んで膨らみまるでスポンジの上を歩いているような不思議な感触が足の裏から伝わってきた。いつも舗装された固い道しか歩かないからかその柔らかな不安定さに最初違和感があった。

「なんで、木を切るのだろう。」

間伐という慣れない言葉に疑問を持つと、

「いい森がいい水を作るのです。」

間伐指導員の方から森と水の関わりについて聞いた。ここで降った雨は木々を伝い地面に吸い込まれる。隙間がたくさんある土壌はスポンジの役目をし、森は水を蓄え徐々に河川に送り出し渇水を防ぐ。長い年月をかけて土が微細な汚れをろ過し、ミネラルを含むおいしい水を作るのだ。緑のダムと呼ばれている。

「いい森とそうでない森の違いは？」

「なぜ、森に人の手が必要なのか？」

僕の疑問に指導員さんが丁寧に答えてくれた。病気の木や枯れ木を除き、混み合いすぎた木を伐採して光を入れなければ、森林の働きも衰えてしまうらしい。森を守る人達の重要性を感じた。山村に人がいなくなると山が荒れる。山が荒れれば水も濁る。河川の水質浄化と水道水の関連性しか知らなかった僕は、森林や林業を営む人々と水の関係に驚かされた。長い年月をかけて一滴のおいしい水を生み出す森の力とその森を守る人々の努力を知った。

緑のダムを守る話を聞き、以前行った奈良俣・藤原ダムとそこで働く人達の話を思い出した。これらのダムも洪水を防ぎ、河川に適量の水を提供して渇水を防いでいる。

一滴の水も失う恐ろしさと得る難しさ、一滴の水を生み出す人々の努力。一滴の水に感謝し、守る努力を忘れずにいたいと思う。